



冒険とは、人間が
どこまで強く、
自由になれるか
という実験

ゲスト◎プロスキーヤー・冒険家

三浦 雄一郎氏

プロフィール ● みうら・ゆういちろう

1932年、青森市生まれ。北海道大学獣医学部卒業。64年イタリア・キロメーターランセに日本人として初めて参加、当時の世界記録樹立。66年富士山直滑降。70年エベレスト・8,000m世界最高地点スキー滑降を成し遂げ、その記録映画はアカデミー賞を受賞。85年世界七大陸最高峰のスキー滑降を完全達成。2003年5月、次男の豪太とともに世界最高峰エベレスト山(8,848m)登頂。当時の世界最高年齢登頂(70歳)と初の日本人親子同時登頂の記録を樹立(ギネスブック掲載)。アドベンチャー・スキーヤーとしてだけでなく、全国に1万人の生徒がいる広域通信制高校、クラーク記念国際高等学校の校長として、また行動する知性人として国際的に活躍しながら、2008年5月に75歳でエベレスト再登頂に成功。プロスポーツ大賞殊勲賞、ニューヨーク映画祭ゴールデンイーグル大賞(南極大陸遠征記録映画)など多数受賞。総務省・総理府などの公職を歴任し、ワシントン州名誉市民にも選ばれている。記録映画、写真集、著書多数。

大自然に培われた自信と知恵

— どんな子ども時代を過ごされたのでしょうか？

青森県の八甲田山で生まれ、冬は屋根から積雪に飛び下りたり馬そりで走り回り、夏は近くの海岸線で素潜りをしたりと、野生児そのものでした。父の転勤で、仙台、岩手、東京と何回も転校をしましたが、どこでもすぐになじみ、遊びの天才でした。

ところが小学校4年生のときに、仙台の進学校に編入させられると生活は一変しました。一日中勉強しな

いとみんなに追いつけない。その上体育も落ちこぼれでした。木登りも泳ぎも得意なのに、なぜか体育館やプールではうまくできないんです。劣等感とストレスでとうとう結核性肋膜炎になり入院してしまいました。子どものころから心臓には不整脈もあって、決して身体が丈夫だったわけではありませんでした。

やっと退院した病み上がりの私を、父は蔵王へ連れて行きました。普通なら「風邪をひかないように」とかばうところを、父は振り返りもせずにどんどん行ってしまふ。私も意地になってスキーを担いで深い雪の

中を泳ぐようにもがきながら必死で進みました。それから1週間、大学山岳部の冬山訓練に参加し、最後は一流の登山家でも厳しいと言われた蔵王の冬山縦走コースを歩き通しました。自然に圧倒されながらもその素晴らしさにワクワクした、強烈な体験でした。そして「大人について行けた、学校ではぶりでも誰にもできないことをやった」という自信が、萎縮していた心を解放してくれました。最初の人生の転機だったと思います。

もっともその後、病歴のためか中学受験に失敗。ショックと恥ずかしさで、自殺を考えるほど落ち込み、今で言う

引きこもり状態になりました。そんな私に、母は「一回落ちたくらいで何をメソメソしているの。中学なんて来年もあるじゃない」とにかくおらかな母でした。この一言ですっかり立ち直り、それから毎日、誰もいない自然の中で遊び、手当たりしだいに本も読みました。この1年間の浪人生活で得た自然の知恵や未来への夢はその後の人生に大きな影響をもたらしたと思います。

——プロスキーヤーになったきっかけを教えてください。

中学、高校、大学とスキーに熱中した私は、北海道大学では獣医学部に進み、さらに卒業後も助手として大学に勤めながら、昼はスキー、夜は研究という生活をしていました。学長秘書をしていた妻ともその時期に結婚しました。しかし何か物足りない。「もっと広い世界に出たい」と助教授への道を蹴って退職しオリンピックを目指すことにしました。

ところが青森県予選をトップ通過したときのことで。役員から「予算の都合で代表枠4人のうち2人しか全国大会に出場できない」と言われ、おかしいじゃないかと意見したところ「生意気だ」と大問題になり、アマチュア資格を永久はく奪されてしまったのです。

意気消沈する中で、仲間にも励まされた私たち夫婦は長女を連れて東京に出て、知人の車庫の上の物置きに住み、カメラマンの助手や山のガイドをしたりしながら、職業としてのスキーを模索していました。そのころ、米国で「第1回プロスキー選手権大会」開催の記事を見つけました。「これだ!」と思い申請し、東洋人初のエントリーが認められると、裸一貫で現地入りして、有名選手のスポンサー企業を回り、道具やお金を調達しました。その大会で、最初の賞金100ドルを手にして、日本人第1号のプロスキーヤーとなったのです。1962年、30歳直前の時でした。

その後、世界トップクラスの選手から超一流の厳しさを学んだ私は、「日本人だから」という言い訳を捨て、



1966年4月25日 富士山のスキー滑降。九合目の最大傾斜で時速160kmに ©ミウラ・ドルフィンズ

冒険しなければ世界には通用しないと実感しました。そこで、究極のスピードレース“キロメートルランセ”に日本人として初めて参加することに。標高4,000mから最大斜度40度の氷河を一気に滑降するレースなので航空力学の研究も必要と考え、防衛庁の航空研究所と共同で、どうしたらスピードが出るかを研究し、その結果、当時の世界記録を樹立し、海外で名前が知られるようになりました。

未知なるものへの好奇心と チャレンジ精神が人類を進化させる

——富士山のスキー滑降などほかに例のない活動をされましたが、冒険家となった理由をお聞かせください。

新幹線から富士山を眺めていたときに、ふと「あの斜面を直滑降したい。パラシュートでブレーキできないかな」と思い浮かび、それを航空研究所で話すと「面白いじゃないか」と一気に計画が盛り上がりました。周囲からの批判や私自身の不安もありましたが、努力が本物なら結果は神が運命という形で教えてくれると信じて決行。成功したとき、競争の勝利とはまるで違う清々しさと達成感と喜びを感じ、「一番になりたい、誰もやっていないことをやりたい」という冒険心はどんどん強くなっていきました。

そんなとき、1953年に人類初のエベレスト登頂に成功したヒラリー卿を訪ねる機会に恵まれました。彼がエベレストを制したのは私が20歳のときで身震いするほど感激したのです。そのヒラリー卿に「人類はどの時代にも解決不可能だと言われることを乗り越えてきた」と励まされ、エベレストからのパラシュート滑降を決心しました。この計画には、松下幸之助さん、本田宗一郎さん、盛田昭夫さんなどビジネス界でチャレンジ精神を持って歩まれてきた方々に物心両



2008年5月26日 エベレスト山頂にて ©ミウラ・ドルフィンズ

面で応援してもらい、1970年、奇跡的に滑降に成功しました。

キュリー夫人が2度目のノーベル賞を受賞したときの記念講演で「我々科学者は、実験室で地味な研究をこつこつ続け、確かに職人みたいだけれども、魔法使いの弟子みたいに不思議な好奇心とときめきを持ちながら、未知の世界に挑戦している」と話したそうですが、この精神は冒険者も一緒です。昔の探検家も「この海の向こうには何があるのだろうか」という好奇心を持ち、苦難や危険を乗り越えたところに発見がありました。人の遺伝子には、未知なるものへの好奇心や冒険心があり、それが人類を進化させてきたのです。

——70歳でのエベレスト初登頂は世間を驚かせましたが、何がきっかけだったのでしょうか？

世界7大陸最高峰からの滑降を達成したのが53歳。これで一区切りついたなと思い、それからは講演やスキースクールの指導などをしていました。引退気分で連日暴飲暴食を続け、気がつくと、165cmの身長に体重82kg、体脂肪40%の見事なメタボ体型に。高血圧、高脂血症などの生活習慣病にかかり、医者に叱られても漫然と過ごすうち65歳になるころには入院が必要な



エベレストで最も危険なローツェフェースを登る ©ミウラ・ドルフィンズ

ほどひどくなっていました。

一方、家族はというと、父は白寿の記念にモンブランの水河をスキー滑降するとトレーニングに励み、次男の豪太はモーグルでオリンピックだ、ワールドカップだと頑張っている。ジェラシーと惨めさで「このままでは70歳まで生きられない、死ぬ前にやりたいことをしなければ」と奮起しました。「そうだエベレストの頂上を目指そう」とかつての夢が再燃したんです。

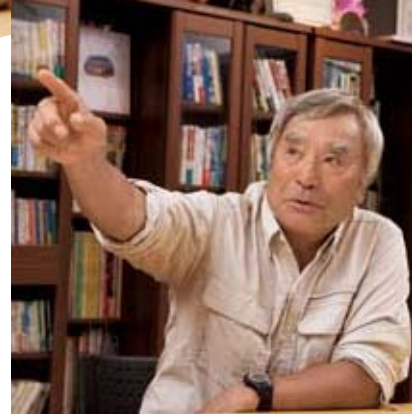
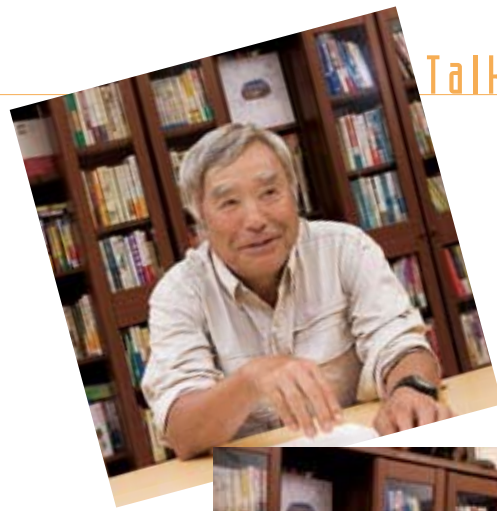
最初は札幌の藻岩山に登って見ましたが、すぐにダウン。80歳過ぎのご夫婦や幼稚園児に追い越される始末です。でも、このどん底状態からエベレストに立てたら面白い。ダイエットのためのトレーニングでは飽きてしまうので、登山靴を履いて重りをつけて街を歩きました。生活にトレーニングを組み込んだのです。そして2年目で富士山を、残り3年で毎年1,000mずつ標高をあげていく計算です。

好きなものを食べ、飲むことはやめませんでしたよ。でも体重は20kg落ち、関節の痛みも完治しました。

しかし、エベレスト登頂は簡単ではありません。2003年にカトマンズに入ったときには標高4,000m手前でひどい不整脈が出て死にかけ、やっとの思いで4,300mのところにある高山病研究所へたどり着きました。登山中止かヘリコプターで送り返されるか、半分諦めていました。ところが診てくれたアメリカ人のドクターがすごい人で、「エベレストを直滑降したあなたなら大丈夫、なんとかなる」と下痢止めだけくれて送り出されてしまったんです。このプラス思考の暗示のおかげか、心臓は持ち直し、70歳のエベレスト初登頂は成功したんです。私の人生では要所要所で、こんないい出会いに助けられてきました。



エベレストのアイスフォール(氷瀑)では、クレバスをはしごで渡る ©ミウラ・ドルフィンズ



ハンディを乗り越えた “アンチエイジング”エベレスト登頂

——今回の75歳での再登頂は、アンチエイジングプロジェクトとのことですが、どのようなことでしょうか。

私にとっての冒険は、人間がどこまで強く、自由になれるかの実験なのです。今回は「後期高齢者」になるという私がどこまでやれるか挑戦したかったのです。また、人類が史上初めて迎える高齢化社会の研究のためにも、高所での低酸素環境が人体にどのような影響を与えるのかなどを、私を実験体に調べることも大きな目的でした。

エベレストは、酸素は地上の3分の1、肉体年齢はプラス70歳になると言われる場所です。75歳の私は医学的には145歳になるわけで、すでにあり得ないこと。心電図も脳波も数値上は「死んでいる」と判断されるような状態でも、実際には生きています。今の科学の常識を超えた世界がエベレストの頂上なんです。

また、私の心臓病は治るはずがない、という専門医もいましたが、登山家でもある日本医科大附属病院の小林義典先生は「前例がないので危険性は大きいですが、手術にトライする価値がある」と言いました。そこで小林先生の紹介で、土浦協同病院の家坂義人、鶴野起久也先生に2度の心臓手術をしていただき、その先生方の見守る中、今回のプロジェクトを進めました。

エベレストでは、小型の心電計を30分から1時間おきに心臓に当てて様子を見ましたし、急に登ったらどうなるか、不整脈は大丈夫か、毎日の心拍数の変化を読み取り、そのデータを日本に送信して解析してもら

いました。

登頂自体は、北京オリンピック前のチベット騒動とオリンピックの警備の影響で、6,450m手前で2カ月も足止めされたり、急きょネパール側からの登頂に変更になったりとアクシデントもありましたが、慌てることはありませんでした。

唯一心配だったのは、私をサポートしてくれていた豪太が途中、脳浮腫で危険な状態になりながら自力でキャンプに戻った時です。8,000m付近は酸素を吸わなければ3分で意識を失う場所です。若くて一番体力のある者でも死にかける。このときばかりは不安でした。

5月26日、無事に山頂に着いたとき、前は曇っていた空が晴れ渡り、ヒマラヤの山々がすべて見えしました。祝福されている、やってよかったと思った瞬間でした。75歳の今だからできた。次は80歳でやるしかありません。

——最後に、読者へメッセージをお願いします。

他人と比較してあきらめたり、できない理由を考えるのではなく、とにかくやってみようと思心することが大切です。

父、敬三が100歳を超えても現役プロスキーヤーだったので、三浦家は特別だと思われるのですが、ほとんどの親族は70歳前後で亡くなっており、長生きの家系ではありません。つまり遺伝による影響なんて、あっても25%くらい。あとは育ちや本人の努力次第でどんな可能性もあるということです。

人生も山と同じ。途中で雪崩に遭ったら無茶をしないでチャンスを待てばいい。エベレストだって一歩50センチの積み重ねなんです。夢を持ち続けければ不可能はありません。